

法で作られていました」と話

キャスティング〟という手

基づいて計画を立てる を基に将来を予測し、それに

マスタープラン作成に当たって行われた、路上駐車対策と一方通行・歩道整 備の社会実験。プノンペン市公共事業局の副局長など、現地の若手リーダー が沿道住民との調整に尽力して実現。学生ボランティア(写真左)も協力した

民へのアンケ 関係者と協議を繰り返し、 ペンの場合、 昔と同じ計画の立て方は現実 未来予測が難し 、わない。 古藤さんたちは 環境問題が深刻 そこでプノン

プノンペンで交通量が特に多い道の一つ ロシア通り。市内から西側に伸びるこの通 りに沿って、市街化が進んでいる

たな課題は市内交通が見守る王の都

日において、川の存在は逆に足かめとする陸運の重要性が増した今 川、トンレサップ川、トンボジアの首都プノンペン。 優れた立地の都市だが、 水運の要所として栄えてきた。 の合流点に位置し、 万超の人口を擁するカン 車をはじ レバコン

部や南部でも開発が始まり 路や橋の整備などのおかげで、 と説明するのは、 開けた西側に広がってきました」 藤政人さんだ。「近年は、環状道 いるため、 が、 の交通整備計画に関わっ まだ西側ほどは街が広 長年にわたりカ ツ研究所の古 つつあ 北

コン川などが東側に位置し プノンペン市はより

ボジアでは主要な幹線道路

交通マスター プランの変遷

首都プノンペンの発展に寄り添い、未来を描く交通計画を追った。社会の移り変わりは、必要とされるインフラの変化も意味する。 経済発展著しいカンボジア。

チミンからプノ タイ の首都バンコクまで ン ペンを経

プランの当初の狙いは、 交通インフラの本格的 日本の協力に - プラン 主な対 交激 マなに



From Cambodia

カンボジア

市内バスの運行実験初日。特 に、若い世代は公共交通機関 に大きな期待を寄せている

由して、の整備・ を結ぶ国際回廊も完成 より作成されたマスタ プノンペンでは、

しい内戦を経て疲弊した都市の 整備が2001年に始まった。

の未来を想定。公共交通利用率を 2年のゼロから35年に3割

意識を尋ねる調査結果を踏まえて ような軌道系が開通したら、どの ンペンには存在しない都市鉄道の 字は野心的に見えるが、 度と考えると利用率3割と が鍵になるのだ。 るためには、 ズに人や車が移動できる環境を作 なときに利用してもらえるか 仮想的な条件下で利用者の 公共交通機関の活用 渋滞なくスムー 東京でも5割程 · のプ

政府・ たちが積極的に関わっていくべきるのは上層部の役割と考え、自分 るのは上層部の役割と考え、 プラン作りはプランナ もちろんのこと、学生や民間企業、 説明する古藤さん。実際に、 せて取り組む必要があります」 民を含めた関係者全員が力を合わ 市の活力を維持するためには、 般市民など、多種多様だ。その 「環境や財政的な制約の中で、都 地方行政機関や交通警察は 関係者の中にもマスタ 大学でも都市計画を扱う いない 人も多い 実行す マス

> 者の交通安全教育を進める必要が プノンペンに根付かせ、道路利用までに、これらの公共交通機関を 始まっている。プロジェクト終了ムの構築などは日本の協力で既に 心部の信号整備と公共バスシステ 案した短期アクションプラン、 これから軌道系整備に向けた準備地の確保にめどが付き、いよいよ のプロジェ それと並行して提 軌道系公共交ンの中で最優先 車両基地用 都

活性化の両者が欠かせない」とのには地方部の貧困削減と、首都のた古藤さん。「カンボジアの発展 を立案するのが、 いう。アンコールワットがあるカ排気ガスの悪影響を被っていると は亡き古藤さんの妻もカンボジア ジェクトにも参加する予定だ。 のみならず地方部の交通安全プロ カンボジアを見守っ ルワッ 第二の都市シェムリア ルワットを訪れた。その 来年度は、プノンペン 最後の夫婦旅行では 古藤さんの次の も、近年は車 今 0

> 現地関係者との会議。使える 土地や予算が限られる中では、 多くの人たちとの話し合いやコ ンセンサスの構築が不可欠だ (一番左が古藤さん)

プロジェクトを実施し、プノンペ交通安全に主軸を置いた技術協力

のが、2014 14

- 4年版の交通マスタン 新たに策定された

プランだ。

ら取り組むべき課題を導き出

ックキャスティング

古藤さんは「高度経済成長期

という手法で作られたこと。

に日本が手掛けたマスタープ

これまでの成長実績

深刻化するプノンペンの交通事

市公共事業運輸局や交通警察と

交通事故が増えるという問題を抱

えていました。そこで、

年代のプノンペンは公共交通が普

しないまま車やバイクが増加

新たな公共交通計画未来の都市の姿を描く

渋滞が深刻化すると同時に、

善に取り組んできた。「20

0

プノンペンの交通状況改 市営バスの運行実験を行 た古藤さんは公共交通の重要性に

を対象とした交通安全教育に力を

車やバイクを運転する人たち

れ、長い時間をかけて利用者の

意味がない。危険な事故を防ぐた

プラン策定から関わってきる盛り込まれた。当時のマ

運転免許や取り 交通人材

の育成など

交差点改良などの

安全で快適な街をつくることに取 共に、渋滞や交通事故を減らして

組んできたのです」





交通環境を改善し、

街を活性化

若い世代の専門家を育て

古藤さんは胸の

市の中心部では渋滞が深刻化 している。かといって、道を広げ、 交通量を増やすには限界がある。公共交通機関の出番だ